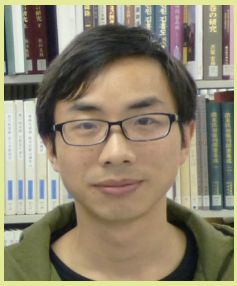
招聘研究員

氏　　名	鄧　苗（Deng Miao）
所属機関等	北京師範大学　民俗学与文化人類学研究所　博士課程
受入期間	2015年11月30日～2015年12月19日
指導教員	小熊　誠（チューター：閻　好悦）
研究課題	民間文化と民衆国民精神／コミュニティー精神の形成 ―日本の秩父夜祭など伝統祭事の考察



文化資源としての伝統民俗文化
――日本・秩父夜祭の考察

鄧　苗

2015年11月30日から12月19日にかけて、神奈川大学非文字資料研究センターの招聘を受け、日本で20日間にわたる訪問研究を実施した。滞在期間中、埼玉県の秩父夜祭、千葉県にある国立歴史民俗博物館や、東京都では泉岳寺の赤穂義士祭や浅草寺の羽子板市など民俗文化の視察を行った。本レポートは埼玉県の秩父夜祭を調査事例とし、現代社会が伝統民俗を文化資源としていかに利用しているかについての考察としたい。

調査プロセス

来日前にインターネットで秩父夜祭に関する情報や秩父市の概況、中国国内の新聞・雑誌に掲載されている日本の神道信仰と神社文化、文化財や伝承者の制度、更には中国国内の祭祀に関する研究論文を収集・閲覧するなどしたほか、秩父夜祭に関する取材レジュメを作成した。日本到着後には、非文字資料研究センターの成田紅音さんから、事前に集めてくださった秩父夜祭に関する多くの日本語資料（現地へのアクセスなど）を頂いた。このように、十分な準備の上に秩父夜祭の調査に臨むことができたといえよう。

12月2日、チューターである閻好悦さんと共に午前6時25分に白楽を出発し、9時30分ごろ秩父に到着した。秩父神社についたときには神楽殿での神楽奉奏はすでに始まっており、我々はそれぞれ分かれて神楽が終わるまで写真と動画での撮影を行った。その後、神社内の各社殿や施設の写真を撮影。間もなく、中町屋台が秩父神社の東側の道路から神社に向けて出発したので、我々も屋台についていきながら動画や写真を大量に撮影した。その後、中町屋台が神社の境内に到着すると、大勢の人が神社境内南側から神社の中心である本殿に向かっていった。祭礼が始まり、先頭の神主が祝詞を読み上げ、各町会のマーク入りの法被を着た参加者を率いて祈祷を奉げた。その後間もなく、本町、上町、宮地などの屋台も次々に神社に到着し、境内はすぐに人でぎっしりと埋まった。我々は境内でしばらく過ごした後、秩父まつり会館を見学した。秩父まつり会館には豪華絢爛な屋台の実演や模型が展示され、秩父夜祭の歴史に関するビデオが放映されていたほか、屋台と笠鉾の制作道具や国の重要有形民俗文化財と重要無形民俗文化財の指定証書など夜祭に関する資料展示コーナーもあり、秩父夜祭の成り立ちと変遷および屋台の制作道具・工程について、より総括的で明確な理解を深められる場所となっている。この時点でちょうど昼の12時だったので昼食をとった。昼食の後、「屋台芝居」の会場となっている電器店の前に行き、屋台芝居の舞台を組み立てている様子を見た。この屋台は中町屋台で、スタッフはみな中町の法被を着ていた。そうこうするうちに秩父神社の境内に集まっていた各町会の屋台曳き廻しが始まったので見に行き、写真や動画を撮影するなどして一日目を過ごした。

12月3日は11時ごろに白楽を出発し、午後1時40分ごろ到着した。我々はまず屋台芝居の会場である電器店の前に向かったが、残念ながら屋台芝居はすでに終わっていた。そのため同行の閻さんに、秩父夜祭を見に来ていたある一人の年配の方へ簡単な取材をしてもらった。この方は埼玉県熊谷市の集落から来た方で、秩父夜

◉写真１　神主が各地区の屋台グループを率いて本殿に向かい祝詞を読みあげる

◉写真２　秩父夜祭会館の展示板

◉写真３　秩父夜祭に参加していた金沢出身の老人

祭を見に来るのは今回で二回目とのことであった。一人で来ており、秩父夜祭のほか、京都の祇園祭も見に行くのだという。熊谷は秩父から近い距離にあり、また比較的交通の便もいいので京都にも行きやすいということだった。故郷は金沢で、金沢も歴史のある地域で「百万石祭り」という主に地元の人が参加する祭りもあるそうだ。また、金沢には夏祭りを行う小さな神社があり、地元の人が参加する際には、山車を曳きながら共に歩き廻ることができるという。また、山車には小さな車輪がついており、子供たちも縄を曳きながら参加することができるのだそうだ。ほかにも元旦祭があり、神社の神主が一年の平安無事を祈る行事となっているということであった。この方との話を終え、我々は矢尾百貨店第一駐車場にある秩父歌舞伎会場に秩父歌舞伎を見に行った。その後６時半に始まるクライマックスの団子坂の笠鉾・屋台の曳き廻しを見るため、５時半に団子坂に向かった。そこでは、各町会の人々が屋台を曳きながら決められたルートを巡り、さらには遠くの夜空にきらびやかな花火が上がるのを見ることができた。この日は秩父夜祭のメインの日ということもあり、見物客は昨日よりかなり多かった。会場では屋台行事のほか、主な通りの両脇には食べ物を売る露店がびっしりと軒を連ね、それらを買い求める客で込み合いかなりの人出であった。ほかにも、秩父の地酒である秩父錦や夜祭のポストカード、絵、布袋などの雑貨などを売る店も多くあった。

調査の所感

今回視察した神楽奉奏は主に神楽殿で行われ、役者は全員大人であった。儀式性に富み、楽器の伴奏のもと役者の演技（所作事）を通じてその神楽が人々に伝えたい特定の内容を伝えるものであり、こうした演目は中国北部で見られるシャーマンの儀式に類似している。しかし観光化が進んでしまった現代では、その場は多くの観光客や近代的な撮影道具に囲まれ、伝統的な神楽が本来持つ荘厳さや神聖さは薄れてしまっている。それでもなお、舞台の上の役者の表現や所作からは、この種の儀式が持ち合わせる原始的で神秘的な意義が伝わってくる。役者の道具さばきや所作事は外部からの影響をあまり受けていない。神楽殿で演じられる神楽の表現そのものは観光化の影響を受けていないとすれば、秩父歌舞伎はその逆と言えよう。秩父歌舞伎の演目は主に各町会の屋台や矢尾百貨店第一駐車場に設けられた舞台で演じられる。役者は主に子供たちで大人の指導を受けており、屋台の下にいる観客との間に活発な相互作用が見られる。つまり観客の反応が役者の表現に直接影響を与えるのだ。そのため、この種の演目から感じられるのは生活の息吹であり、厳かで神聖な儀式のそれではない。矢尾百

◉写真４　神楽殿の上で神楽の上演が行われている様子

◉写真６　子どもたちの歌舞伎上演を見守る観衆

◉写真５　屋台の上で上演する子供たち

◉写真７　商店で販売されていた秩父夜祭の記念品

貨店第一駐車場で上演される演目は二つに分かれており、一つは子供の、もう一つは大人の演目であった。大人の演目より子供の方がはるかに多くの観客を引き付けていた。子供たちの演技が醸し出す感覚は、歌舞伎そのものが持つ芸術性はもとより、独特の面白味を感じさせるもので、ことさら人々の気を引くのだった。それは演劇は通常その多くは大人が演じるものであるが今見ているのはそれとは違う光景であるからなのか、或いは観客の多くは子供たちの家族なので観客の反応がすべて舞台の上の演技に影響を与えるからではないだろうか。逆に、大人の演目のときはかなり静かであった。こうしたこと以外に秩父歌舞伎を見て感じたことは、その表現には含蓄があり落ち着いた印象で、中国の戯曲のような激しい感情の表現や緊張感のあるテンポは見られないという点だ。日本の歌舞伎は静かに鑑賞し、歌舞伎が放つ情緒を専ら理解することにこだわりを置いているのだろう。

今回の調査テーマでは文化資源としての伝統民俗文化を取り上げた分、埼玉県の秩父夜祭の二日間にわたる実地調査と考察を通じて、人々が伝統民俗文化を文化資源として利用する上でいくつかのタイプがあることを認識するに至った。一つは、民俗文化が地域のアイデンティティの伝達手段となり、人々は伝統的な民俗行事に自ら参加することでそれを支えていく姿勢を示す、という在り方である。写真や絵、カレンダー、木札や布袋などの各種工芸品・記念品や雑貨を作って売ることで、民俗文化は利用可能な資源となる。それにより民俗文化が本来持ち合わせているある種の娯楽の要素が無限に引き伸ばされ、民俗行事が一種の大衆のカーニバルとなるのだ。二つ目は、民俗文化が社会を活性化する手段となるという在り方である。担い手の現場では、老人から若者や子供までもが行事の中でそれぞれ違う役割を演じ、社会の各層が行事作りの中に取り込まれるのである。行事の効果として、歴史ある地方民俗文化の保全と実演を行うという意識を持つと同時に、関連商品や地元特産品の展示

販売を通して経済的収入を得ることができる。また、地元の多くの人たちを巻き込むことで現代的なライフスタイルの日常にいつもとは違う光景を加え、生活に張りを与えている。更には観光客が来ることで外部からの情報が入ってくると同時に、秩父夜祭の情報も地域の外に広く発信することができる。三つ目は、民俗文化が地域社会のシンボルとなるという在り方である。秩父夜祭は決して観光客のためだけに作られた地方の祭事というわけではなく、むしろ地域の民俗文化財の保全と伝承のために行われているものである。そのため、外部の人たちが秩父を理解するための単なる一つの地域のシンボルというばかりでなく、自身の文化の伝承システムとアイデンティティの絆を構築する文化的シンボルでもある。この文化的シンボルとその創造プロセスへの参加を通じて、人々は秩父への、更には先人たちが作り上げた文化的遺産への理解とアイデンティティを深めるのである。

結論

旅行・観光というものが、現代社会において重要な社会的景観と産業を構築するようになり、また20世紀半ば以降世界的に民族の目覚めや文化への自覚ブームが起こる中で、地域社会に根ざした民俗文化は地元の人々と外部の社会が共に追い求める対象となった。そのため、現代社会に生きる人々は民俗文化の再利用をある種のツールとして見るようになった。文化のツール化と娯楽化のダブル作用により、民俗文化は他の文化様式と共に地域社会にとって地域のアイデンティティ構築や社会の活性化、自己PRの手段となっているのだ。埼玉県の秩父夜祭を通じて本レポートが述べたこの三タイプの現象は、現代社会が伝統民俗文化を一種の文化資源として利用する在り方の一部に過ぎない。こうした利用の在り方が民俗文化に与える長期的な影響については、より多くの実地調査を通じた更なる考察が必要であろう。

今回の訪日では、秩父夜祭及び各種民俗活動を見学したが、時間的に慌ただしかったことや筆者の日本語レベルに限界があったことから、総括的な深い研究にまでは至らなかったことが残念である。また機会があればこのような民俗活動や日本の他の民俗文化をさらに深く研究し、中日両国の文化学術交流と民俗学の発展に貢献したいと願っている。

作为文化资源的民俗传统——日本秩父夜祭考察

北京师范大学　邓　苗

2015年11月30日至12月19日，我受日本神奈川大学非文字研究中心资助，在日本进行为期20天的访学，期间对琦玉县秩父夜祭、千叶县国立历史民俗博物馆、东京泉岳寺义士祭和东京浅草寺羽子板市等民俗文化进行了考察。在这篇文字中，我想以琦玉县秩父夜祭的调查为例子，来研究现代社会是如何将民俗传统当作一种文化资源进行利用的。

调查过程

在来日本之前，我自己在网络上对有关秩父夜祭的情报、秩父市的概况、中国国内报刊杂志上发表的有关日本神道教信仰和神社文化、文化财及传承人的制度、中国国内祭祀的相关研究方面的论文进行了搜集和阅读，并且制订了一份关于秩父夜祭的访谈提纲。到达日本之后，非文字研究中心的成田红音老师又给我许多她搜集的日语的关于秩父夜祭和到达路线的有关资料。因此，可以说对于秩父夜祭的调查做了比较充分的准备。

12月2日，我和我的TUTOR闫好悦女士6：25分从白乐出发，大约9：30左右到达秩父。我们到秩父神社时，神乐殿已经在进行神乐表演，我们分头拍照和拍摄视频直至结束。之后，我们在神社里拍摄了各种神殿和设施的照片。过了不久就有中町的屋台从秩父神社东边的道路上向秩父神社进发了，我们随着屋台的行列拍摄了大量的视频和照片。中町的屋台到达秩父神社内部的小广场之后，众人在秩父神社的小广场中向南朝着神社核心的大殿进行祭拜，一位领头的主祭人宣读祭文，带领那些穿着绘有各町标志的传统服装参加秩父夜祭的民众进行祝祷。之后不久，本町、上町、宫地等地的屋台也陆续抵达秩父神社中的小广场，小广场中一下子被挤满了。我们在小广场呆了一阵之后就出来去秩父夜祭会馆参观，秩父夜祭会馆展出制作华丽的屋台及其缩小版模型，播放关于秩父夜祭发展历史的宣传片，还有专门的展柜，展出屋台和笠鉾的制作工具，政府颁发的有形文化财和无形文化财认定证书等各种秩父夜祭的实物和有关文字展板。通过这个展馆，人们能够更加清楚和完整地了解秩父夜祭的产生和演变过程，以及各种屋台的制作工具和制作工艺。这时候已经中午12点了，我们去一家餐馆吃饭。吃完饭，我们就去秩父电器店之前看人们搭建“屋台芝居”表演的屋台。这所屋台是中町负责的，工作人员都穿着秩父夜祭中代表中町的传统服装。除此之外，刚才到秩父神社中的小广场集中的各町的屋台都开始在路上巡游，我们也过去拍了一些照片和视频。第一天就这样过去了。

12 月 3 日，我们 11 点左右从白乐出发，到达秩父大约是下午 1 点 40 分，我们首先来到秩父电器店之前，“屋台芝居”的表演已经结束了，陪我同来的闫好悦女士对一个过来参观秩父夜祭的老人进行了简单的访谈。这位老人是琦玉县熊谷市乡村地区的人，已经是第二年来参观秩父夜祭了，是自己单独过来的，他除了来参加这个秩父夜祭之外，也会去参观京都的祇园祭，因为从熊谷到秩父和京都都比较近，交通也很方便，所以就会去参观。他的家乡在金泽市，金泽也是个很有历史的地方，有一种叫做“百万石”的祭，主要都是当地人参加的。金泽有一个规模比较小的神社，在夏天举行祭祀，是夏祭，当地人参加的时候可以拉神车，也可以跟着走。也会让小孩子参加，神车下面装有小滑轮，便于小孩子拉绳子参与进去。除此之外，金泽在元旦的时候还会举行元旦祭，请当地神社的社头主持祭祀，祈祷当地一年平安无事。今天显然是秩父夜祭最重要的日子之一，过来参观的游客比昨天多了许多。和金泽的老人聊天完毕之后，我们去矢尾百货店第 1 驻车场观赏歌舞伎表演。到下午 5 时 30 分，我们去团子坡等候 6 时 30 分开始的大规模的屋台曳回活动，看到了各町的民众拉着本町的屋台在预定的道路上巡游，以及远处夜空中燃放的绚丽的花火。除了这些表演，在秩父市的主要路段两侧，一家一家的小吃摊鳞次栉比，过来品尝小吃的游客也摩肩接踵、数量可观。除此之外，在许多地方，还有秩父当地的秩父锦酒和关于秩父夜祭的卡片、画框、布袋等物品出售。

调查感受及结论

我们所观察到的日本神乐表演主要出现在神乐殿中，演员都是成年人，有丰富的仪式、动作，在乐器的伴奏之下，通过演员的表演传达关于特定神乐所希望传达给人们的意义，这种表演类似于中国北方的萨满仪式，但是在当前这样一个旅游、观光的时代，游客的大量在场，现代摄影摄像工具的在场，使得传统神乐所应该具有的庄重和神圣意味有所消解。尽管如此，我们还是要承认，就屋台上的表演来看，演员的表演和动作都传达了这种仪式所具有的某种原始和神秘意义，他们对道具的使用，对于动作的把握并没有受到外部因素太多的影响。如果说神乐殿上神乐的表演本身较少受到旅游观光的影响的话，那么歌舞伎表演则与此相反，歌舞伎表演主要出现在各町的屋台上和矢尾百货店第 1 驻车场的舞台上，屋台上的表演主要是由小孩在大人的教导下进行的，他们的表演过程和屋台下面的观众有大量的互动，观众对他们表演的反应对于他们的表演有直接的影响，因此，在这种表演中，我们体会到更多的是一种生活的气息而非庄重神圣的仪式气息。矢尾百货店第 1 驻车场的舞台上表演分为两段，一段为小孩子表演，一段为成年人表演。小孩子表演吸引了远比成年人多的多的观众。她们的表演给人的感觉除了歌舞伎表演本身所具有的艺术性之外，还有许多趣味性，因此更加吸引人们的注意力。因为观众看到了与平时大多数由成年人所进行的表演不一样的场景，或许观众中有许多就是这些小孩的家人，因此他们的各种反应都影响着舞台上的表演，相反，成年人的表演现场则安静的多。除了这种外在因素的影响，笔者所感受到的歌舞伎的表演含蓄、沉稳，不像中国的戏剧那般感情浓烈、节奏紧张，日本的歌舞伎更多的讲究安静地欣赏，用心地体会，体会其所散发出来的韵味。

这次调查的主题是作为文化资源的民俗传统，通过这两天对于琦玉县秩父夜祭的观察和思考，认识到民俗传统作为文化资源被人们所利用有以下几种形式：第一，民俗文化成为地域认同的载体，人们通过对于传统民俗活动的亲身参与表达了一种支持的态度，包括图片、画框、日历、木牌、布袋在内的各种工艺品、纪念品和生活用品的生产和销售，使民俗文化成为人们可以利用的资源，民俗文化中原本所包含的某种娱乐的因子就会被人们无限地放大，从而使成为民俗活动成为一种大众的狂欢。第二，民俗文化成为社会活化的手段。从秩父夜祭活动的现场来看，作为一种民俗文化，老年人、青年人和小孩分别在活动中扮演了各不相同的角色，社会的各个阶层都被吸引到了对这一活动的建构当中。从活动的效果来看，这一活动的举行在保存和展演历史悠久的地方民俗文化的同时，通过秩父夜祭衍生品、当地土产品和小吃的展卖，增加了居民的经济收入，将当地大部分的居民都裹挟进了这一活动中，在作为日常生活的现代式生活中增加了一段与平时不同的景观，娱乐了人们的生活，同时外地观光客的到来也使得外界的信息得以进入，关于秩父夜祭的信息得以传播到区域之外更广的地方。第三，民俗文化成为地域社会的标志。秩父夜祭并不是一个完全为观光旅游而设计的地方节日，而更多是人们出于保存和传承地方民俗文化财的目的而进行的，因此，秩父夜祭不但是外界了解秩父的一个地域标志，同时也是当地建构自身文化传承体系和认同纽带的一个文化标志，通过这一文化标志和对这一文化标志塑造过程的亲身参与，人们对于秩父，对于祖先所创造的文化遗产有了更多的理解和认同。

研究结论：在旅游成为现代社会的一种重要的社会景观和产业构成之后，以及 20 世纪中叶以来世界范围内的民族觉醒和文化自觉浪潮下，立足于地方社会的民俗文化成为当地民众和外部社会共同追逐的东西，这使得现代社会的人们对于民俗文化的再利用具有了某种工具性的意义，在文化工具化和文化娱乐化的双重作用下，民俗文化与其他文化形式一同成为地方社会构建地域认同、活化社会、推销自己的一种手段。本文通过琦玉县的秩父夜祭所论述的这三种现象只是现代社会将民俗传统当作一种文化资源进行利用的一个部分，对于这种利用对民俗文化产生的长远影响，我们还有待通过更多的实际观察来做进一步的考察。

对于秩父夜祭以及此次来日所参观的各种民俗活动，由于时间紧张和笔者日语水平的有限，未能做更加全面和深入的研究，殊为遗憾。希望以后能有机会对这些民俗活动和日本的其他民俗文化进行更多的研究，为中日两国之间的文化学术交流和民俗学学科的发展贡献自己的一份力量。